2001年(平成13年)10月「農政と公務労働」

『ドリーム』

夢持つ人のほんわかネットワーク

高木正三

発行のきっかけ

九州農政局構造改善課時代（平成十年四月～十三年三月）、都市農村交流や異業種交流を通じて多くの方々と知り合いになり、仕事は違っても、色々なところで自分自身の夢を描きながら前向きに歩んでおられる方々からいつも一方的に元気をもらっていた。

イヤと言うほどの生産調整を行いながらも価格が安くなるばかりのコメ、汗水流しながら作った野菜も輸入野菜に押され暴落の現実、これら現場第一線の人達は自分自身の夢を描きながらも、各種の連絡会議等で顔を合わせると、「今の行政は」「今の国のやり方は」と話される。そして、その後に続く言葉は否定的なことが多く、いたたまれない気持ちとなっていた。農業や農村社会の抱える現実問題を知れば知るほど、公務員としての自己の業務とのギャップにジレンマを感じていたのである。

公務員としての自分自身の仕事に邪魔にならない範囲で、このような人達の手助けができないかと考え、「そうだ。夢を持っている人達を紹介しあおう」農業だけでなく、食や環境に興味を持っている人、研究者、グリーンツーリズム関係者等各地で一生懸命頑張っている人達、何かを発信したい人達の本音を語り合える場所を作ろうと思ったのが、ミニコミ誌『ドリーム』発行の第一のきっかけである。

第二のきっかけは、『緑のハート便』廃刊による読者からの強い要望である。

食料・農業・農村基本問題が議論されている頃、都市住民に対する行政サービスの必要性が高く叫ばれ、地方農政局も都市農村に関する情報発信を行うこととし、「農山村の豊かな緑と都市住民の温かいハートをくっつけよう」のキャッチフレーズの下、構造改善課の有志により『緑のハート便』なる情報誌を発行していた。構造改善事業等の国庫補助事業で都市農村交流施設等を作っている市町村からなる「九州自然休養村協議会」の機関誌として、月二回A四判裏表、会員市町村を主体に、農家民宿・レストラン、農業者、研究者、関係団体等に五〇〇部情報提供した。第三九号まで発行した頃、構造改善局を中心に農林水産省でも度重なる疑惑事件が起こった。それに関連し市町村協議会の事務局を農政局で担当することに疑問を感じ、『緑のハート便』の発行を中止した。今まで楽しみにしていた読者の方々、特に現場第一線の農家の方々や農家民宿の方は「何で？」「どうして？やめたの」と、問い合わせが多く再発行が求められていた。このことが『ドリーム』発行の第二のきっかけである。

発行（活動）の特色

読者は『緑のハート便』時代に熱烈な読者でありかつ投稿者でもあった大分県国東半島を中心に大分県内の素敵な農業ウーマングループ、熊本県小国町で開催される九州ツーリズム大学の愉快な仲間、

-1-

大学の先生や研究職、農家民宿やレストラン等、九州農政局構造改善課での都市農村交流の仕事を通じて知り合った人達が多い。九州ツーリズム大学とは、毎年九月から三月まで、将来の農業ビジネスを考えたりグリーンツーリズムに興味のある異業種の方々が勉強する機関である。

これらの人達の中で夢ある人、元気のある人、何事かにトライする人一〇〇名限定と銘打ち発送している。とは、言いながらも、発行し始めて四～五ヶ月になると読者の中から、「誰々はどこどこで夢を持ち頑張っている、是非送ってもらいたい」という友が友を呼ぶ連鎖反応が生じ、九月現在二一〇名ほどの読者である。

毎月十五日が発行日。発行した後は、次の号のため読者から寄せられる手紙やファックス、メールを昼休み時間などを利用してパソコンに打ち込む。発行日が近づくと、レイアウトを考えミニコミ誌の形を整える。封筒への宛名書き、読者一人一人へのメッセージ書き等は我が家で行い、封筒詰めや切手貼りはオッカナイ（家内）が手伝ってくれる。十五日に必ず届くよう十三日には投函する。

封筒等の消耗品や郵送代は手出し（編注：自己負担の意）で行っている。誰からも疑惑をもたれないようするためである。読者でも六ヶ月間何の連絡もメッセージもないとその人には発送をストップする。親切の押し売りになってもいけないし、みんなで作るミニコミ誌の意味からすれば読者の入れ替えも必要だと思う。

第七号（平成十三年五月）を発行した後、地元新聞「熊日」の新生面の欄で『ドリーム』が紹介された。朝日新聞で言えば「天声人語」の欄である。朝早くから知人からの電話はあるし、読みたいけどどうすれば良いかの問い合わせもあった。

新生面

熊本日日新聞二〇〇一年六月八日付
コラム「新生面」

熊本市の高木正三さん（五二）は「何かやっていないと寂しい性分」の人だ。都市農村交流＝グリーン・ツーリズムのミニコミ誌を作り始めて半年が過ぎた▼〝高木道楽情報〟と笑う月刊「ドリーム」は百人の読者で満杯。音さたなしならバッサリ切り、切った分だけ新顔を入れる。「原稿や反響がくることで私も元気になれる。やる気のある人がいつも百人おればいいんです」▼手紙やメールが届くとパソコンにパチパチ。発行日がせまればその文章を動かして印刷。さらに協力者の「オッカナイ」（夫人）と袋詰めに切手はり。目下、輸送費は手出し。飲み屋で会う知人に「まだ物好きなことを」と冷やかされつつ、〝お調子者〟高木さんの奮闘は続く▼四月から農業者年金基金に勤務。前職は九州農政局構造改善課の課長補佐。局内のツーリズム応援誌を昨年二月まで三十九回発行。廃刊を惜しむ声に〝おだてられ〟「ドリーム」編集長に。今度は完全な個人誌だ▼百人は九州を中心に農家、研究職、行政、民宿経営…とさまざま。約六割が女性で寄稿者の八割も女性。デコポンのオーナーを呼び掛けたり、子牛が生まれた喜びや農家レストランの夢を語ったりと現場第一線の声が文面に躍る▼グリーン・ツーリズムといえば農水省系団体による専門家養成講座も今月始まった。将来は農山村の基幹産業にとの期待も。価格は下がる一方のコメや野菜に農家の実生活は大変だが「みなが生産するだけじゃダメと思い始めている」と高木さん▼明日を信じたい思いが、愚痴も言い合える「ドリーム」への愛着につながっているようだ。

運営上心がけていること

(1) 情報は生もの・現場第一線の声

内容として一番心がけることは、情報が新しいものであること。農業者、民宿経営者等々現場第一線の方々が直接発する情報を、できるだけ原文を崩さず載せている。トツトツとした素朴さのためかそれが読む人の共感を呼んでいる。当初は目に留まった新聞記事を活用していたが、号を増すごとに読者からの直接の投稿で紙面を埋めている。「情報は生もの、情報は現場にあり」

(2) 誰でも気安く投稿・投稿者の幅の広さ

ミニコミ誌は文学的な表現が必要ではなく、読む人が楽しく気軽に読めればいい。農家レストランの女主人が自分の思いを書いてくる。ネギ農家、トマト農家、牧場や土のにおいが紙面に踊る。消費者からの声、普及員の頑張り、大学教授が原稿料もなく冗談を交えながら気軽に投稿する。ここでつけたのが「夢持つ人のほんわかネットワーク」である。

(3) 身の丈のやり方・限定だから価値がある

公務員労働者としての昼間の仕事を行いながら、ミニコミ誌の発行を続けるにはある一定の限界がある。休日や時間外を利用した製作時間、発送費用負担等の経済的問題を考え一〇〇名前後としている。

(4) 商品管理・顧客管理

仕事上、「農産物について商品管理は大切なことですよ」など安易に言うが、公務員労働者としてはそのような経験は皆無である。私自身『ドリーム』を一つの商品として捉えている。お客さん（読者）が満足するために商品が十五日には読者の手元に必ず届いていること。字は詰まりすぎていないか、配列はよいか、読む人が疲れないか、印刷はきれいか、必ず読者の立場で考えるための商品管理を行っている。

また、毎号とも「貴方だけへのメッセージ」を一面に設け、読者一人一人に対し、その人への短い便りを書く。相手は誰の紹介であったか？職業は？何に興味があるか？それらを覚えておく必要がある。結局これが私なりの顧客管理である。

ドリームの将来の夢

かけがえのない地球、美しい農山漁村を後世に残すことは、都市住民とか農山村の人達の責務とかに関係なく、現在に生きている私たち全員の問題である。「棚田の勉強がしたい」「乳搾りの経験をしたい」「自分の集落でコンサートをやりたい」等々の要望があるとき、そうだ『ドリーム』に聞けばヒントがもらえる。都市と農村、生産者と消費者の接着剤になるとともに、夢を持ち一生懸命頑張っている人達がお互いの立場をわかり合えるようなネットワークの原点を忘れることなく発行を続けたい。また、生産者や消費者を含め、食・農・環境、グリーンツーリズム等々に関心を持つ幅広い分野からの人々と年に二回くらいの割合で読者交流会を開催したいし、将来は、ホームページの開設や都市農村交流のシンクタンクとなるようなＮＰＯ法人立ち上げへ進展することが私の「ドリーム」である。

（現：農業者年金基金九州連絡事務所勤務）
連絡先：〒八六二―〇九一八
熊本市花立六丁目一三―二三
高木正三
TEL&FAX：〇九六―三六九―六八四二
Eメール：dream.takaki@nifty.com